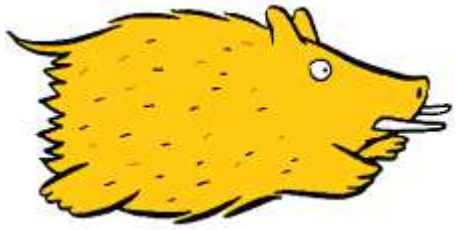
# メアリン隊じゃないから



萬燈除夜編　　by うさお

例年ならば、大晦日の夜は除夜の鐘を聴きながら、家に来ている健ちゃんを送りがてら、曹洞宗本山総持寺に初詣に行っていました。今年はライ隊員が居ないし、倅たちも別行動なので、ご近所の建功寺に行って見ることにしました。

建功寺さんは、やはり曹洞宗のお寺さんで、由緒のあるお寺さんらしく、由来には室町時代からとあります。

このお寺のご住職、枡野俊明さんは造園作家としても有名で、以前、NHKだかのドキュメンタリーに出ていました。その時は宗教家ではなく、アーティストとして出ておられ面白いなあと思いました。

調べてみると、神奈川県建築コンクールで、「寒川神社　直心庵・和楽亭・方徳資料館」の作品で、優秀賞を取られ、神奈川県建築士事務所協会賞も取っています。うさおも建築士ですが、何の賞も取ったことはありません。

「寒川神社」と言えば、日出彦さんがお正月にはいつもお参りされていると言う話。境内もリニュウアルし、参道の橋も架け直されたと聞き、ははあ、この人の作品かと思いました。今年は「寒川神社」に行って見ようかな。

さて、テレビの紹介では、確かにダイナミックな庭造り作家で、お寺さんや神社さんからの依頼が多かったようだけど、他にもホテルや公共の会館、海外の造園も手掛けているようです。

実はここ十年くらいの「健功寺」さんは、新墓地は作るは駐車場は大きくなるはで、何だか遣り手のご住職に変わったのかと、少し嫌な感じを持っていました。だって、それまでの建功寺さんは横浜市の田舎、鶴見の馬場町にあって、目立たないお寺さんだったんですよ。また、馬場町ってところが極端に発展しない町なんですよ。うさおの住んでいるところは、本当、文化果つる地なんですよ。

でも馬場町という地名で「おっ」と思う方は、なかなかの通人です。この地には昔、諏訪氏という豪族が住んでいて、寺尾城址という出城があったみたいです。その出城の馬場があったんですね。

さて、大晦日の夜に建功寺さんに車を止めようと思ったけれど、臨時駐車場も満車の状態で、離れた新墓地の駐車場に行って欲しいとのこと。え～、いいけどさ、あそこからお寺さんまで1㎞くらい歩くんじゃないの？
暗い夜だし、雪が降りそうなくらい寒いし、何かほら墓地で出そうだし…。

ぶつぶつ言いながら、新墓地に車を止めるとご近所なのか、夫婦連れやご家族連れの方々がぞろぞろ歩いています。

あっ、ぜんぜん寂しくないや。

時折、建功寺の鐘の音が聞こえてきます。少し響きに濁りがある。見えないところに亀裂が入っているのかも…。ようやく、山門にたどり着くと、そこはどっぷりと暗い闇の中に、仄明るい無数の明かりが足元にありました。見ると20㎝位に斜めにそぎ落とした太竹の中にお燈明が灯されています。それ以外の照明は使われていない。幻想的な光に導かれて、階段や山門が浮かび上がってくる趣向だ。所々にお燈明を持った若い人が、「こんにちは」とか、「よくいらっしゃいました」とか声を掛けてくれる。後で調べてみると、皆、多摩美術大学の学生さんで例年の行事として参加していたのだ。さて、あまりの暗さにカメラの性能が追随せず、よく撮れません。

この行事は「萬燈除夜」と呼ばれ、住職枡野明俊さんは、多摩美術大学で「造園」を教えているので、教え子たちが手伝いに来ていたんだ。

偉い、偉い。ご興味のある方は「萬燈除夜」でググって下さい。学生たちの奮闘記が載っています。

しかし、三脚と時間が必要だなあ、夜間の撮影は。絞り込んでシャッター開放で、アングルを数方向を撮ったら、これは徹夜だね。と言うことで、昼と夜とをチャンポンで見せますが、ご容赦のほど…。

山門に掛かっていた幔幕は、五色のもので天台宗かと思っちゃいましたが、曹洞宗でしたね。

この階段が35度くらいの傾斜で、登りきるのがとても辛い。息がぜいぜいとして、歳を感じちゃったよね、健ちゃん。

さらに進むと参道をアーチ状に覆った木々の枝に、お燈明を吊るし光の道を作っています。

「おっ、綺麗だ！」という声がお参り客の中から聞こえてきます。歩みは遅々として進みませんがね。

今まで足元だけの明かりが急に頭上に広がるので意表を突いた趣向です。

昼間はこんな感じで、木々が参道を覆う形なので、ここに萬燈を吊るしたのですね。

竹は例年の使い回しだが、お燈明はお寺さんの負担だね。除夜の鐘を撞きおわるまで灯ってないとね。それで学生さんが駆り出されているんだ。しかし、髪の長い若い女子が暗闇で声掛けてくると、思わず「ぎゃあ～」って叫びだしそうになる自分が悲しい。怖くなんかないよねえ、健ちゃん。

暫くの間転びつつ歩いていくと、分岐の道が見えてきました。片や鐘楼に向かう登り道です。Caccoはあっちも面白そうだねと目移りしています。

で、これが鐘楼。竹林の中にご住職の手になるものか、大きな岩が枯山水のように配置されています。この山全体のレイアウトをこの住職一代で変えてしまったのかな。

凄いことだと思う半面、今までの文化がと思ううさお。

竹林を背景に撮ってくれとは、Caccoの弁。

鐘楼に向かう階段の途中にお社が…「白山神社」と読めましたが？先ほど、諏訪神社（諏訪氏の守護神）とゆかりのお寺だったのでは？謎は謎を呼ぶぞ。

呼ばないけど…おお、漸く開けた場所にたどり着き、本殿が正面に見えます。

銅銭か真鋳銭のお賽銭を投げてお祈りをします。ご丁重にお願いを六つぐらい、しておきました。仏様も忙しいしね。この日は右から左に聞き流しているだろうから、一つくらいインパクトのあるお願いをしておかなきゃね。お賽銭を全部くれだとか。

ここのお寺さんは、諏訪氏にちなんで諏訪神社で用いられている「梶」紋ですが、少し形が違うなあ。

これが一般的な梶紋。

諏訪神社の梶紋は下、これに近いけど、葉っぱの形、根っこの形が違う、うさおは知ったかぶりで、こりゃあ山葵紋だなあ…てなこと

を言ったような気がする。え～、わさび紋なんてないです。徳川家康が山葵の葉が葵に似ているので珍重したとの記録はありますが、葵に似ているのでお留め紋になったのかも。（図は三つ葉葵）

さて、入り口で買ったお燈明はここで水盤の中に入れて帰ります。なんだかヨーヨー釣りの縁日のようだ。

昼間は何だか茶色いものの散歩道になっていた。（いいのか？境内にけだものを入れても）

Caccoに突然襲い掛かる茶色いけだもの！

「萬燈除夜の鐘」が終わった後の境内は閑散としています。幽玄さが少し出来すぎたきらいがありますが、（つまりは作りすぎかなと言う気がしない訳ではありませんが）なかなか見応えがありました。

帰りも石のオブジェと言うか、道祖神の集合のようなものにも、ライティングがしてあり、光々しいばかりです。あっ、違った、神々しいばかりです。

実はうさおも茶色いものに襲われておりました。手を半分食べられています。加齢臭があるのでまずいと思うのですが…。

ついでですから、寺尾城址はこんなものです。住宅街の一角に3m×5m位でしょうか、碑が建っています。城址と言うよりは屋形と言えるものだったのかもしれません。

諏訪氏は新田氏なので本来なら、丸に一つ引両ですが、なぜか梶紋でした。

この碑から少し東高校側に下ったところに、殿山公園があり、「寺尾城址」は「新編武蔵風土記稿」に残されていましたが、発掘調査の結果、堀、土塁、曲輪が埋まっていました。

左の図画がその想定図です。

なぜ、その事実が風土記に残っていたのか。

なぜ、馬場町、諏訪坂などゆかりの地名が残っていたのに、埋まった場所が判らなかったのか。

近くにある小机城址は、なぜ幽霊城と呼ばれているのか。（これは関係ないか）

謎が謎を呼びますねえ。（呼ばないって…）

以前に入江川の上流が、遊歩道に整備されたことは、ご報告させていただきました。

その時と比べると、だいぶ自然との融和が出てきたようです。

人と人との触れ合いも進んだようです。

川は半分が遊歩道になり、結構人通りがあります。

まだ、畑も残っているので、ここが横浜市の中心に近い、鶴見区にあるとは思えません。

おじさんに話しかけてみましょう。

「お幾つですか？」

「68歳だよ！」

「‥‥。」(いえ、犬がですが…)

「(俺じゃないのか) …15歳だよ」

「ああ、うちの犬もそのくらいまで生きました。同じような茶色の奴で…」

「そうなんだ」

会話がどんどん弾みます。

白い犬も来ました。田舎だなあ、ここは…。

水道道に在る貯水棟は健在でした